

自己知の本質とその射程について - 近代的主体性 概念の再考 -

著者	嶺岸 佑亮
雑誌名	モラリア
巻	23
ページ	54-71
発行年	2016-10-15
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133328

自己知の本質とその射程について ——近代的主体性概念の再考——

嶺岸 佑亮

序

主体性の思想は、一八世紀後半から一九世紀前半にかけてのドイツ古典哲学において中心的役割を担うもの一つに数えられる。カント、フィヒテ、ヘーゲルといった哲学史上きわめて重要な哲学者たちは、それぞれの仕方で主体性の思想を形成したのであった。だが、時代が下り、他の様々な思想的潮流が生ずるにつれ、この思想は批判の対象とされるに至ったのであった。主体性に対するこうした批判的態度は、マッハをはじめとする自然科学的なアプローチや、また、フロイトのような心理学的立場や、更には、ハイデッガーのような実存論的立場のうちにも共通して認められる^①。特に、一九三〇年代半ば以降のいわゆる中・後期のハイデッガーは、近代における存在忘却(Seinsvergessenheit)が由って来る所以を主体性のうちに求めている^②。

これらの批判が共通して対象とするのは、無限なもの、あるいは「絶対的なもの」に特有の主体性である^③。その際、これらの批判のうちには、有限な存在者たる人間を超越するようなものについて哲学的に論じることとは無意味である、ということも同時に含意されている。この指摘そのもののうちには確かに適切な点が含まれているといえ

よう。

だが、注意すべきことに、いわゆるドイツ古典哲学の思索家たちは、有限な存在者に接近不可能で隔絶しているような「絶対的なもの」を主張しているわけではない。むしろ、とりわけヘーゲルに認められるように、有限な存在者が自己自身をその本質において知ろうとするという、その自己認識のプロセスにおいてこそ、無限なものが立ち現れるのだとされている。⁽⁴⁾ その点からするならば、有限な存在者の自発的で知的な活動が重要視されているのが分かる。こうした点については、二〇世紀後半以降ドイツを中心にドイツ古典哲学についての見直しが進むとともに再検討がなされてきたのであった。

それと呼応するようにして、主体性の思想を哲学的思索の中心の一つとして復権させようとする動きが見られるようになってきた。中でも、特に重要な人物としてD・ヘンリッヒが挙げられよう。彼は、カントやフィヒテに対する優れた洞察を基礎にしつつ、英米の分析哲学（とりわけR・ノージック）との対話を行いながら「意識的生（bewusstes Leben）」という独自の概念を提示している。⁽⁵⁾ また、ヘーゲル哲学に鋭い理解を示す研究者として知られるK・デュージングは、ヘーゲル論理学における絶対的主体性の理論に関する自身の優れた研究を基礎にしつつ、有限な存在者に特有な主体性についてその様々な要素を分析しつつ統一的に理解しようとする試みを行っている。⁽⁶⁾

このように、主体性の思想を改めて独自に検討することは、近代的思想の所産である主体性を現代にふさわしい仕方で生かすことを意味する同時に、主体性をその中心的原理とするドイツ古典哲学そのものを改めて根本的に見直すことをも意味する。とはいえ、そうした課題は、本稿とは別のところで、かつ大きな射程のもとで取り組まれるべきものであろう。だがいずれにしても、人間という有限な存在者は、〈知る〉というはたらきによってこそ、際立った存在者としての位置を占めているはずであらう。そうである以上、その自発的で知的な活動がどのような

ものであるのか、ということについて、掘り下げた考察が必要であるといえよう。

本稿では、こうした観点のもと、以下のような手順で主体性について論じる。まず、主体性が自己知として成り立つことについて、それも、個別的なものたる〈私〉の自己知として成り立つことについて論じる【1】。次に、この自己知が自己関係的であり、他ならぬ〈私〉自身によって形成されるとしても、だからといって、それ自身のうちに閉ざされているのでは決してなく、むしろ〈世界〉に立脚した上でこそ展開可能であることや、また〈私〉が世界との関係において自己規定を行い、自由である、ということについて論じる【2】。さらに、〈私〉が有限な存在者である以上、それ自身が自己知の根底をなすことはあり得ず、むしろより高次のものを根底とすることについて述べる【3】。また、そうした根底が果たしてどのようなものとして理解されうるのか、ということについても論じる。最後に、〈私〉の自己知やその生における展開と〈学としての哲学〉との関連についても考察する【4】。

1 自己知の活動とプロセス

ドイツ古典哲学では、無限なものや絶対的なものに対して極めて重要な位置が与えられていた一方で、それと同時に、有限な存在者たる人間が一体何者であり、その本質が何であるのか、ということに対して徹底的に問いが向けられたのであった。この有限な存在者は、それ自身によって自発的な仕方での思考のはたらきを行い、かつ様々な行為をすることからして、〈主体〉と特徴付けられる。主体の活動は、その内容がどのようなものであれ、それ以外の別の何かによって生じるのではなく、主体それ自身からして自発的になされるところのものである。その際、主体は、自らが行う活動のうちに単に没入してしまうことはない。むしろ、主体は、自らが一定の活動を行って

る、ということ意識しており、またその活動を行っているのが自ら自身である、ということも意識している。従って、主体には一定の仕方で〈自ら自身を意識する〉ことが不可欠であるのが分かる。

このように、主体は、活動的であると同時に〈自己知〉のはたらきによっても特徴付けられる。その際、この自己知は、不特定のもの、あるいは無名のものではなく、むしろ活動を行う「この」主体自身に固有なものである。換言すれば、ここでいう自己知は、他ならぬ〈私〉の自己知なのである。⁽⁷⁾ 〈私〉が一体どのようなものであるのかということは、〈私〉とは別の何ものかが〈私〉自身に対して明らかにするのでは決していない。そうではなくて、〈私〉は、知るといふはたらきによって、一定の仕方で自己関係を形成するのである。フィヒテがいうところの自我の自己定立や、またシェリングが「A || A」という定式のもとに述べる絶対的同一性の思想は、こうした自己知のはたらきにおける自己関係を言い表そうとしたものだといえよう。⁽⁸⁾

このことを別の角度から見ると、〈私が私自身である〉ということの所以は、〈私〉の自己知のうちに求められる、ということと同じである。更に、こうしたことのうちには、思考や思想の契機だけではなく、それと同時に現実性の契機も含まれている。⁽⁹⁾ すなわち、〈私〉がこの特定の個別的なものとして現実的に存在するということの基盤は、そうした思考や思想のうちにこそ見出されるのである。ただし、そのことが意味するのは、思考が現実性を支配する、ということではない。というのも、思考は、現実性から離れた別の領域に求められるのではないからである。むしろ反対に、思考は、現実性のうちにこそそれ固有の場を有しており、かつそこにおいてこそそれ本来の役割を発揮すると理解される。

またこの場合、思考といっても、純粹に学的・理論的な性格のものを意味するわけではない。むしろ、現実的に存在するところの〈私〉が自らの知のはたらきによって当の自ら自身を担う、というその在り方にかかわる

のであり、別の言葉で言うならば、その〈生〉にかかわるのである。D・ヘンリッヒは、こうした在り方のことを「意識的生 (bewusstes Leben)」と呼んでいる。⁽¹⁰⁾これに従うならば、〈私〉が現実的に存在するということは、〈私〉が自らの在り方がどのようなもののかを意識し、それにより、自ら自身を知ることと不可分であり、なおかつ、そうした自己知の活動によって担われている、と理解される。

さらに、ヘンリッヒの理解に従うならば、次のことに對しても光が当てられる。すなわち、〈私〉がその自己知によって自己関係を形成するという場合、〈私〉はそうした関係に先立って前提され得ない、ということがそれぞれある。どういふことかといえ、〈私が私自身を知る〉という場合、〈私〉は、a) 自らの知るはたらきの主体であるとともに、b) その対象でもあることになる。こうしたことのうちに「主体＝客観」という関係が認められるのは確かにその通りである。だが注意すべきことに、自己知における主体としての〈私〉と対象としての〈私〉の両者は、単純な等号で結び付いているわけではない。むしろ、両者の間には区別や差異の契機も同時に認められる。⁽¹¹⁾というのも、シェリングがいう絶対的同一性の場合とは異なり、〈私〉にとって当の〈私〉自身はその知のはたらきに先立って曇りなく明らかであるというのではなく、むしろ〈生〉のなかで次第に自ら自身にとって明らかとなっていくような性格のものだからである。いうならば、〈私〉は、自らの活動によって、自ら自身にとって固有なものとなっていくのである。従って、〈私〉に對して自己同一性が認められるとしても、この同一性は、単に根本原理として予め定立されているのではなく、むしろプロセスとして形成されていくものなのである。

以上のように見るならば、自己知に對しては同時に様々な具体的な規定の獲得という契機が付随するのが分かる。〈私〉が一体何であるのかということに對しては、定義付けのような仕方では確かにとした答えを与えることは出来ない。そうではなくて、〈私〉は、自らの生をその自発的な活動によって一定の方向に導いていく中で、そしてまた、

そのような段階に応じて、〈自らが一体何であるのか〉、ということとその都度明らかにしていくのである。このような〈私が私自身にとってある在り方〉のうちには、〈知る〉というはたらく以外にも様々な契機が含まれている。次節では、それらの契機について検討することにしよう。

2 主体性の自己規定・自由

前節の論述からするならば、〈私〉の自己知がいわば私自身の内部だけで展開されるかのように思われるかもしれない。だが実際にはそうではなくて、この知は、〈私〉の生においてプロセスとして形成される以上、それ自身のうちに閉ざされておらず、むしろその外に対して開かれている。〈私〉の自己知は、その形成のために一定の場を必要とするのである。このことは、〈私〉が世界のうちに存在しており、それを自らの本質にとって不可欠な契機としている、ということの意味する。⁽¹²⁾ 〈私〉は、現に存在する限り、世界のうちに身を置いており、その中で様々なものに関わり、知識を得たり、一定の行為を行うことが可能となる。

その際、世界が〈私〉に対してどのような仕方で立ち現れるのかというその仕方は、〈私〉が自らをどのようなものとして理解するのか、ということに応じて様々な段階をたどる。ここでは、世界がどのように区別され得るのか（例えば、ハイデッガーがいうところの日常的な環境世界や自然的世界であるとか、あるいはまた、人倫的共同体等のように）ということについては立ち入らずに、〈私〉の自己知が世界との関係においてどのように具体的な形態をとっていくのか、ということに着目して論じたい。⁽¹³⁾ それにより、〈私〉の自己知が当の〈私〉自身とは別のものに対して開かれていながらも、それと同時に〈私〉の自発的な働きによって担われ続けていることが明らかとなろう。

〈私〉は、世界のうちに身を置く限り、様々な出来事を経験し、そこから多くの印象を受け取る。それらの多様な経験や印象は、〈私〉の生の根幹にとって全くかわりのないような取るに足りないものに過ぎないわけではない。むしろ、それらの多様なものは、程度の差はあれ、〈私〉が現に実際にある在り方に対して何らかの影響を与えており、更には、〈私〉が現にあるその在り方についての〈私〉自身の理解に対しても一定の方向性や手掛かりを与えてくれる。けれども、〈私〉は、単にそうしたいわば受動的な在り方のうちに身を置くだけにはとどまらない。というのも、〈私〉は、自らの外部からの影響に引き去らわれてしまうのではなく、むしろそうした状態から立ち止まって、自分が現にある在り方が一体どのようなものであるのか、ということについて反省することが出来るからである。こうした反省のはたらきは、〈私〉の在り方をそれを取り巻く世界から区別し、自立的なものとして浮かび上がらせるという役割を果たしている。

このように、反省のはたらきは、〈私〉が単に他のものに依存するのではなく、むしろそこから独立的であることを明らかにする。だとすれば、〈私〉の現にある在り方は、単に他のものからの影響によって決定されるのではなく、〈私〉自身によってこのようであるようにと一定の構想が描かれることによって現実のものとなっていくのだ、ということが分かる。別の言葉で言うならば、〈私〉の在り方は、他ならぬ〈私〉自身によって実現されるのである。⁽¹⁴⁾

このことから、〈私〉にとっての現実性は、単に所与であるのでも、確定済みでもはや動かし難い事実でもあるのでもなく、むしろ自分自身で規定することで生じていくのだ、ということが分かる。こうした自己規定のはたらきのうちには、a) 特定の在り方を選択し、その実現を目指そうとする意志的な契機が認められるとともに、b) そうした特定の在り方を自ら構想するという、思考的・思想的な契機も備わっている。ただし注意すべきことに、

〈私〉自身による自己規定や自己実現によって、世界そのものが根本的な変化を受けたり、あるいはまた、世界が〈私〉の支配の下に置かれる、という事態が生じるわけでは決してない。⁽¹⁵⁾ というのも、一方では、前節で述べたように、思考と現実性の両者が互いに対して異質なものの同士の関係にあるわけではないからであり、また他方では、自己規定や自己実現によって始めて、〈私〉が世界と関係するようになるわけではなく、むしろ〈私〉は現実的に存在する限り常に世界のうちに身を置いているからである。とりわけハイデッガーがヘーゲルの精神概念のうに見ていたような、意志の支配的な性格といったものは、ここでは認められる余地などあり得ない。⁽¹⁶⁾

以上のように、〈私〉のうちに反省や自己規定、あるいは意志といった契機が認められるということは、〈私〉が自由である、ということと同時に意味する。〈私〉が自由であるということは、〈私〉がいかなるものにも、外的な仕方であれ、内的な仕方であれ、制限されたり拘束されたりすることがない、というのである。そのように何ものにもとらわれないことがないようなところからして、〈私〉は、自らの現実的な在り方について熟慮し、様々な可能性のうちから最善のものに従って決断を下し、その実現を目指すべく行為に向かう。従って、自由であるということは、単に非拘束性を意味するだけにとどまらない。のみならず、自由であるということは、自分が本来あるにふさわしい在り方を洞察する、ということでもあり、したがって、〈私〉が私自身の本質について思いをめぐらせる、ということなのでもある。

こうした本質的な在り方に伴って、規範性や人倫性 (die Sittlichkeit) の問題が生じてくる。⁽¹⁷⁾ というのも、〈私〉は、他の一切のものから区別されるような個別的なものであると同時に、自らの思考のはたらきによって最善の可能性に従って自己実現を行う以上、普遍的なものでもあるからである。そうである以上、〈私〉の自由は、単に恣意的なものであったり、気の赴くまに勝手に取り扱うことのできるようなものではなく、むしろ一定の規範や法則

に則っていなければならないからである。とはいえ、この場合、法則といっても、a) 〈私〉に対して外在的に与えられることはあり得ないであろう。むしろ、そうした法則は、b) 〈私〉自身の本質にかなうような固有なもの
でなければならぬであろう。そしてなおかつ、c) この法則は、〈私〉の自発性を妨げるのではなく、むしろ成
り立たせ、支えるところのものでなければならぬであろう。勿論、このように理解する場合、様々な困難が伴う
ことであろう。けれども、まさしくこうした自由と法則の関係こそ、カントが強調しようとしたものであり、また
フィヒテとヘーゲルがそれぞれ独自の仕方を受け止めた根本問題の一つでもある⁽¹⁸⁾。

かくして、〈私〉が他ならぬ〈私〉自身を知り、それによりまさしく本来的に自ら自身であることのうちには、
自由と法則性の両者が、また個別性と普遍性の両者が交差している。これらの契機は、互いに対して排他的な関係
にあるのではなく、むしろ相互に補完し合う関係にある。現代において主体性の理論を徹底的に追求しようとする
ならば、これらの対極的な契機どうしの様々な関係の仕方全体を包含するような理解を獲得することが課題となる
であろう。

3 主体性の根底の問題 ―有限と無限の関係―

自己知によって際立つところの〈私〉は、同時に自由な存在者でもある。とはいえ、そうしたことは、〈私〉が
完全に自ら自身の意のままになる、ということを意味しない。というのも、〈私〉は、有限な存在者である以上、
デカルト的な自己確信の場合とは異なり、自らにとってどこまでも曇りなく明瞭であるわけではなく、むしろ自ら
の生においてその自発的な活動によって次第に自らを自ら自身に対して明らかにしていくからである。⁽¹⁹⁾ だとすれば、
〈私〉が自らの生のどの段階においても自ら自身を一定の仕方を知ることが出来、それにより自己関係性を維持す

ることを可能にするような根底が求められねばならない。

自己関係のうちに（たとえより高次なものであるとしても）何らかの他なるものの介在が不可欠であるということとは、一見奇妙に思われるかもしれない。だが、有限な存在者たる〈私〉にとっては、a) 自己認識を行う場合に様々な思い違いや思い込みに陥る可能性があり、またb) 自らの意志や自由によって自己実現を目指すとしても、そのことが上手くない場合も十分にあり得る。⁽²⁰⁾ 〈私〉は、現実的に存在する限り、そうした可能性から完全に逃れることは出来ず、どの段階においても注意深くあらねばならない。

けれども、もしそうした錯誤や失敗に陥ってしまったとしても、それでもなお、〈私〉が〈私〉自身として存在すること自体が失われてしまうわけではない。むしろ、〈私〉は、そうした否定的なものに向き合い、自らが本来あるべきところの在り方や目指していたものについて省察することで、一度陥ってしまった状態から抜け出すこともまた可能である。そうである以上、〈私〉が他ならぬ〈私〉自身として存在することを成り立たせ、保ち続けるような根底が求められるべきであるのが分かる。ヘーゲルが彼独自の哲学体系の中心的概念の一つとして「否定性（die Negativität）」を導入していることは周知のとおりである。ヘーゲルが「否定性」について詳しく論じるのは、主著の一つであり、彼独自の絶対的な主体性理論が展開される『大論理学』においてである。⁽²¹⁾ とはいえ、この概念は、初期フランクフルト期におけるキリスト教思想との批判的対決の中で次第に形成されてきたという経緯がある。⁽²²⁾ このように、ヘーゲルにおいては、無限なものや絶対的なものが立ち現れてくるのは、有限なものに特有な「否定性」を介してのことである。⁽²³⁾

こうしたヘーゲル的な理解を手掛かりにするならば、次のことが分かる。すなわち、有限な存在者たる〈私〉の有限性がまさしくそのものとして問題とされるのは、世界との関係においてではなく、むしろ根底との関係におい

てである。²⁴⁾ というのも、この根底は、世界そのもののうちには求められないからであり、却って、〈私〉は、自らの根底について省察することで、世界に対する関係を変容させ、新たな関係の仕方を構築するからである。

ここで、〈私〉という有限な存在者に関して根底といったものを想定することに対して、おそらくは異論が出されるかもしれない。すなわち、そのような根底といったものなど、結局のところ、〈私〉によって作り上げられた虚構以外の何物でもないのだ、というように。だが、すでに近代哲学の創始者であるデカルト自身、〈思考する自我の明晰判明な認識を支えるところの根拠としての神〉という思想を表明していたのであった。その際、デカルトは、神のことを〈必然的な存在者 (ens necessarium)〉と特徴付けている。²⁵⁾ それによれば、根拠としての神は、存在したりしなかったりするというように、その存在が単に可能的に過ぎないようなものであるのではなく、むしろ〈存在しないものとして考えることが不可能なもの〉であると理解される。このように、近代哲学は、その始まりからして神の思想と深いところで結び付いている。²⁶⁾ そうである以上、この哲学の所産である主体性の思想を新たな仕方で生かそうとするならば、〈自発的に思考し行為する有限な存在者の根底〉としての無限なものや絶対的なものという思想についても新たな仕方で問い直す必要があろう。

その場合、根底が果たしてどのようなものとして理解されるのが問題となる。これについては、すでにドイツ古典哲学内部でも様々な解釈が提出されてきたのであった。たとえば、i) カントが主張するように、有限な存在者の意志の自律や自由を確保し可能にするものとして、道徳的視点から理解するのか、それとも、ii) 後期フィヒテのように、それ自体としては現象しないものの、活動的な自我のうちに像として立ち現れるのだとするのか、あるいはまた、iii) ヘーゲルのように、有限な存在者と同様にそれ自身も主体性をその根本特徴とするようなもの、すなわち絶対的な精神として理解するのか、というように様々な解釈の余地がある。²⁷⁾

これらのいずれの線に沿って解釈をするにしても、次の問題を問うことが重要となるであろう。その問題とはすなわち、そもそも根底が有限な存在者にとって接近可能であり、明らかなものとして知られ得るのか、それともそうではなくて、根底はあくまでも有限な存在者から隔絶したままにとどまるのか、というものである。この問題は、内在と超越の関係の問題として言い表すことが出来る。これは、とりわけ超越的一者を根本原理として掲げる新プラトン主義哲学とドイツ古典哲学との境界線を見定める上でも重要となる。⁽²⁸⁾ シェリングとヘーゲルの両者は、それぞれ独自のアプローチで新プラトン主義哲学に触れつつ各々の哲学体系を構想していったわけであるが、彼らにおける主体性理論のうちに超越の問題がどれだけ入り込んでいるのか、又は否定されているのかということは、有限な存在者たる〈私〉の自己知の問題について考察する上でも極めて重要な手掛かりを与えてくれるであろう。⁽²⁹⁾

4 哲学の原理としての主体性

以上の論述では、有限な存在者たる〈私〉の自己知に着目しつつ、そのプロセスやそこに見られる諸契機について考察してきたのであった。主体性の問題は、〈私〉が自らの自発的な活動によって自身の生を担っていくそのプロセスそのものに即して考察されるべきである一方で、それと同時にそうしたプロセスに見られる諸契機や諸段階を一つの統一的な連関のもとにとらえることも重要となる。⁽³⁰⁾ というのも、すでに述べたように、〈私〉の自己知のうちに既に個別性の契機のみならず、普遍性の契機も同時に認められる以上、この自己知は、学的・理論的認識において普遍的な仕方ではとらえることが出来るようなものでもあるはずだからである。このことは、〈私〉が自らの生を生きる中で獲得する様々な具体的な内容を単に捨象する、などといったことを意味し得ない。むしろ、様々な局面において経験を重ねる中で、多くの洞察や認識を獲得することを可能にするような〈私〉自身に備わる普遍的

な構造がそれ自体として明らかにされる必要があるのである。

こうした一点においてこそ、生と〈学としての哲学〉の両者が出会うことになる。〈学としての哲学〉が普遍的な認識の領域において展開されることは確かにその通りである。だがだからといって、哲学は、生から隔絶したところで永遠不変の「体系」といったものを形づくるわけではない。むしろ、哲学的思索は、〈私〉が自らの生の中で自己自身について洞察を深め、また自らが身を置く世界についての理解を広げるとともに、自らの根底についても省察を重ねる中でこそ成立するのである^③。

まさにこのことこそ、様々な点における違いはあれ、ドイツ古典哲学の思索家たちが一致して主張したことなのであった。彼らが示すところの純粹な思想の境地は、有限な存在者の生から隔絶した領域を純粹にそれだけで取り出そうとするのでは決してない。そのことは、例えばフィヒテが知識学での嚴密な学的認識を単に学的な仕方だけにとどめることなく、そうした仕方に馴染みのない一般の人々にも近付き得るような洞察として提示しようと試みたことから窺えよう。彼が一般向けの講演として行った『淨福なる生への導き』（一八〇六年）や『ドイツ国民に告ぐ』（一八〇七年）は、そうした試みの成果である^④。さらに、ヘーゲルが『精神現象学』でその最終的な境地として示した「絶対知」もまた、有限な存在者の自己知から隔絶したものとはされていない。むしろ、ヘーゲルに従うならば、絶対知においても「自我＝自我（Ich=Ich）」という、有限な存在者の自己関係性は破棄されることなく、その反対に絶対的なものに不可欠な契機としてとらえ返されるに至っている^⑤。

また、こうしたことに加えて、ドイツ古典哲学では、哲学的思索が本来的には「体系」としてのみ成立可能であるという、一致した了解が認められる。その際、「体系」がそもそも形成可能であるためには、揺らぐことのない確実な原理が基礎に置かれる必要がある。だが、もし主体性を哲学的思索の中心点に改めて置こうとするならば、

その場合、そうした確実な原理を予め確定済みのものとして基礎に置くわけにはもはやいかないであろう。というのも、もし仮にそのように想定するならば、有限な存在者たる〈私〉が自ら担い、遂行するところの生のプロセスがあくまでも副次的なものにとどまってしまふことになるからである。むしろ、〈私〉がそうしたプロセスの只中において自らが何であるのかを自覚し、かつその自覚によって活動を更に展開していくという在り方そのものの中に他ならぬ「原理」が浮かび上がるような仕方で探求を進める必要があろう。そうすることによってこそ、〈私〉がその自己知において純粹に自発的であり、世界や根底へと関わりながらも、いかなる他のものによって担われているのでもなく、むしろ自らの活動によって自らを担う、というその主体的な在り方が真の意味で有意義なものとなる。

結び

以上の論述では、有限な存在者たる〈私〉の自己知のプロセスや仕方、並びにその契機としての世界や根底について見てきたのであった。〈私〉というものは、それらの様々な契機との関係やその中で獲得される様々な経験を抜きにしていわば抽象的な仕方で定義付けることが不可能なものである。けれどもまた、〈私〉というものは、単にそれらの契機のうちへと還元して説明することの出来ないものでもある。とりわけ、無限なものや絶対的なものを持ち出される場合、そのように説明してしまおうとする傾向が生じるといえよう。だが、その場合には、〈私〉は、結局のところ、そうした無限なものや絶対的なものに依存したものとなってしまう結果となる。〈私〉が自由であり、その限り何ものにも依存しないことは確かにその通りである。ただし、この自由は、〈私〉それ自身に由来するのではなく、むしろより高次のものによって支えられているのである。このことは、〈私〉の自発性を

断念することを意味するわけではない、むしろその反対に、自由が単に偶然的で恣意的なものではなく、それ自身のうちに内的な必然性を有していることの証しである。この洞察こそ、ドイツ古典哲学の系譜において、カントやフイヒテ、またヘーゲルが一致して主張したことなのであった。今日においても、そのことの意味について熟慮を重ねる必要があろう。

註

- (1) 主体性の思想に対する様々な哲学上の立場から批判については、以下の論稿を参照。K. Dising, *Selbstbewusstseinsmodelle. Moderne Kritiken und systematische Einwürfe zur konkreten Subjektivität*, München 1997, bes. S. 25-120.
- (2) M. Heidegger, "Überwindung der Metaphysik", in ders.: *Vorträge und Aufsätze*, Stuttgart 11te Aufl. 2009, S. 67-95, bes. S. 69ff. Ders., *Nietzsche II*, Stuttgart 1961, bes. S. 450ff.
- (3) 絶対的な主体性については、以下を参照。K. Dising, *Das Problem der Subjektivität in Hegels Logik. Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Prinzip des Idealismus und zur Dialektik*, Bonn 1976, bes. 69ff. なお、絶対的な主体性に対する批判については同書の以下の箇所でも分析・議論がなされている。ebd. S. 15ff.
- (4) この点については以下の拙稿を参照されたい。嶺岸佑亮, 「純粹な自己意識の学としてのヘーゲル論理学」、『『実存思想論集』、理想社、XXXX号、二〇一五年、一三三〜一四〇頁、特に一三三頁以下。
- (5) 意識的生については以下を参照。D. Henrich, *Fichtelines. Philosophische Essays*, Frankfurt a/M, 1982, bes. S. 99ff. Ders.: *Bewußtes Leben. Untersuchungen zum Verhältnis von Subjektivität und Metaphysik*, Stuttgart 1999, bes. S. 11f., 49ff., 63ff. Ders.: *Denken und Selbstsein. Vorlesungen über Subjektivität*, Frankfurt a/M 2007, bes. S. 20ff., 23ff., 68f.
- (6) K. Dising, *Selbstbewusstseinsmodelle* (註を参照), bes. S. 123ff.
- (7) いずれについても以下を参照。D. Henrich, *Denken und Selbstsein* (註を参照), bes. S. 59ff.
- (8) フイヒテにおける自我の自己定立については以下を参照。J.G. Fichte, "Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre", in ders.:

- Gesamtausgabe*, I, 2, hrsg. Von R. Lauth und H. Jacob, Stuttgart - Bad Canstatt 1965, bes. S. 259, また「シェリングにおける絶対的同一性については以下を参照」F.W.J. Schelling, "Darstellung meines Systems", in ders.: *Werke* Bd.10, hrsg. Von M. Duner, Stuttgart-Bad Canstatt 2009, bes. S. 118ff.
- (6) D. Henrich, *Denken und Selbstsein* (註5を参照), bes. S. 20f. また「この点については、ヘーゲル論理学における現実性における論じた以下の拙論を参照されたい。嶺岸佑亮「『定立されていること』と自らを根拠とすることーヘーゲル論理学における現実性について」『ヘーゲル哲学研究』「こぶし書房」vol.20「二〇一四年、一五七―一七〇頁、特に二六四、及び一六七頁以下。」
- (10) D. Henrich, *Bewußtes Leben*. (註5を参照), bes. S. 12ff. Ders. *Denken und Selbstsein* (註5を参照), bes. S. 68f.
- (11) デュージングは「有限な主体の自己関係が単純な主観⇌客観関係に還元され得ない点を強調しており、むしろそうした自己関係のうちに非対称性 (the Asymmetrie) の契機が常に同時に存在する」といふ。K. Düsing, *Selbstbewusstseinsmodelle* (註1を参照), bes. S. 97ff.
- (12) D. Henrich, *Fluchlinien* (註5を参照), bes. S. 104ff. Ders.: *Denken und Selbstsein* (註5を参照), bes. S. 37ff., 49ff. W. Schulz, *Ich und Welt. Philosophie der Subjektivität*, Pfullingen 1979, bes. S. 21ff., 29f.
- (13) こうした世界がとり得る様々な形態については以下を参照。K. Düsing, *Selbstbewusstseinsmodelle* (註1を参照), bes. S. 137ff., 234ff., 248ff.
- (14) デュージングによれば「有限な主体が自己意識のはたらきを行うということは、同時にこの主体が具体的なものとされていくことを意味すると理解される。K. Düsing, *Selbstbewusstseinsmodelle* (註1を参照), bes. S. 131ff.
- (15) フィヒテは「一八〇六年の『幸福なる生への導き』の第九講の中で「感性界の内部に新たな、かつ神的な世界をもたらすところの道徳性 (die Sittlichkeit) という、彼独自の思想について論じている。フィヒテによれば、この道徳性は、同時に神的生の発現として理解される。Vgl. J.G. Fichte, "Anweisung zum seligen Leben", in ders.: *Gesamtausgabe* Bd. I, Abt. 9, Stuttgart - Bad Canstatt 1995, bes. S. 1155f.
- (16) M. Heidegger, "Überwindung der Metaphysik" (註5を参照), bes. S. 72. Ders.: "Hegels Begriff der Erfahrung", in ders.: *Holzwege*, Frankfurt a/M 8, unveränderte Aufl. 2003, bes. S. 133.
- (17) 本稿では「こうした規範性や人倫性について詳細に論じる余裕がないが、これについては以下を参照。D. Henrich, *Denken und Selbstsein* (註5を参照), bes. S. 93ff., 117ff. K. Düsing, *Selbstbewusstseinsmodelle* (註1を参照), bes. S. 230ff.
- (18) これについては「ヘーゲルの『大論理学』『本質論』での必然性と自由の関係について論じた拙論を参照されたい。嶺岸佑亮「『定立されていること』」(註5を参照)、特に一五八頁以下、及び一六九頁以下。
- (19) これについては「特に『省察』の第二省察を参照。Rene Descartes, *Meditationes de prima philosophia*, Lateinisch - Deutsch, übersetzt

- und herausgegeben von Chr. Wohlers, Hamburg 2008, bes. 52.
- (20) この点については『デュージングが以下での確に指摘している』。K. Düsing, *Selbstbewusstseinsmodelle* (註1を参照), bes. S. 190ff., 240ff.
- (21) G.W.F. Hegel, "Wissenschaft der Logik. Die Lehre vom Begriff (1816)", in ders.: *Gesammelte Werke* Bd. 12, hrsg. von W. Jaeschke und Fr. Hogemann, Düsseldorf 1981, bes. S. 11f. 243ff.
- (22) ヘーゲルの思索の歩みにおける「否定性」の形成史の中で重要となるのが「一体的で常に〈全体〉としての在り方を保ち続ける「生」と分割や分裂をもたらす「反省」との間の緊張関係である。これについては以下を参照。G.W.F. Hegel, *Frühe Schriften. Werke I*, Frankfurt a/M 1971, bes. S. 375ff., 382.
- (23) これについては、以下の論稿がヘーゲルによる一八〇四／五年のイエーナ大学での講義のための草稿である『体系構想Ⅱ』の「形而上学」をめぐって論じている。D. Heinrich, *Absoluter Geist und Logik des Endlichen*, in: *Hegel in Jena (Hegel-Studien. Beiheft 20)*, Bonn, 1980, S. 103-118, bes. S. 107ff.
- (24) D. Heinrich, *Bewußtes Leben*. (註5を参照), bes. S. 64ff., 68ff. Ders.: *Denken und Selbstsein* (註6を参照), bes. S. 49ff.
- (25) デカルトによる必然的存在者の理解については『省察』の第三省察を参照。Rene Descartes, *Meditationes* (註9を参照), bes. S. 88ff.
- (26) 神の存在論的証明を手掛かりに近代哲学を断面的に描き出した労作として、以下を参照。D. Heinrich, *Der ontologische Gottesbeweis. Sein Problem und seine Geschichte in der Neuzeit*, 2., unveränderte Aufl., Tübingen 1967. 特に「デカルトにおける必然的存在者としての神の思想については」bes. S. 10ff.
- (27) 後期フィヒテにおける現象や像の問題については以下を参照。W. Janke, *Fichte. Sein und Reflexion — Grundlagen der kritischen Vermunft*, Berlin, 1970, bes. S. 400ff. D. Heinrich, *Fichtes ursprüngliche Einsicht*, in: *Subjektivität und Metaphysik. Festschrift für Wolfgang Iser*, Frankfurt a/M, S. 188-232, bes. S. 218ff.
- (28) 新プラトン主義哲学における超越の問題とヘーゲルによるその解釈・批判については以下を参照。J. Halvasson, *Hegel und der spätantike Neuplatonismus. Untersuchungen zur Metaphysik des Einen und des Nous in Hegels spekulativer und geschichtlicher Deutung. Hegel-Studien. Beiheft 40*, Bonn 1999, bes. S. 231ff., 257ff., 273ff., 299ff. また『新プラトン主義とシャーマン・古典哲学との歴史的関係については以下を参照』。W. Beierwales, *Platonismus und Idealismus*, 2. Aufl., Frankfurt a/M, 2004, bes. S. 100ff., 144ff., 154ff. Ders.: *Das wahre Selbst. Studien zu Plotins Begriff des Geistes und des Einen*, Frankfurt a/M, 2001, bes. S. 115ff., 182ff.
- (29) この辺りの問題については以下を参照。D. Heinrich, *Bewußtes Leben*. (註5を参照), bes. S. 106ff.
- (30) これについては、デュージングがシュリングの『超越的観念論の体系』(一八〇〇年)やヘーゲルの『精神現象学』(一八〇七年)

- で示されたような「自己意識の歴史」という理論モデルに従った解釈を提示している。K. Düsing, *Selbstbewusstseinsmodelle* (註1を参照), bes. S. 257ff.
- (31) なお、哲学と生の関係については以下を参照。D. Henrich, *Denken und Selbstsein* (註1を参照), bes. S. 76ff. Ders. *Fluchtlinien* (註1を参照), bes. S. 125ff., 169ff. H. Fr. Fulda, *Spekulatives Denken und Selbstbewusstsein*. In: *Theorie der Subjektivität*, hrsg. v. K. Cramer / H. F. Fulda / R.-P. Horstmann / U. Pothast, Frankfurt a/M, 1987, S. 444-479, bes. S. 451, 472ff.
- (32) J.G. Fichte, "Anweisung zum seligen Leben" (註15を参照). Ders.: "Reden an die deutsche Nation", in ders.: *Gesamtausgabe* Bd. 1, Abt. 10, Stuttgart - Bad Canstatt 2005, S. 1-200.
- (33) Vgl. G.W.F. Hegel, "Phänomenologie des Geistes", in ders.: *Gesammelte Werke* Bd. 9, hrsg. von W. Bonsiepen und R. Heede, Düsseldorf 1980, bes. S. 430ff.
- (34) K. Düsing, Subjektivität in der klassischen deutschen Philosophie von Kant bis Hegel. Ein programmatischer Überblick. in ders.: *Aufhebung der Tradition im dialektischen Denken*, München, 2012, S. 159-182, bes. S. 181f.
- (みねぎし ゆうすけ・東北大学大学院文学研究科・専門研究員)